

第12回 被爆者の声

映画祭 2018

本映画祭は、2006年に日本被団協が50周年を迎えたことをきっかけに企画され、2007年に第1回が開催されました。映像や映画での被爆体験の継承を目的としています。

「広島長崎における原子爆弾の影響 広島編」



ドキュメンタリー/モノクロ
1946年/82分
監修：GHQ
製作：米国戦略爆撃調査団
(実製作は日本映画社)

被爆直後に日本映画社が企画し、文部省学術調査団長 仁科芳雄博士の指導の下に、広島は1945年9月24日より撮影を開始。11月にGHQより撮影中止命令が出て、フィルムは米軍に没収される。しかし、日映スタッフは日本で編集してまとめることを米国戦略爆撃調査団に提案。それが受け入れられて、被爆直後の惨状を科学的視点で捉え伝える本作品となった。米軍監視下での編集であったが、その内容や表現に米軍の干渉があったとの記録はない。昨年は「長崎編」だったが、今回は「広島編」を上映する。

「チャルカ ～未来を紡ぐ糸車～」



ドキュメンタリー/カラー
2016年/90分
監督・撮影/島田 恵
製作/六ヶ所みらい映画プロジェクト

10万年は危険とされる原発から排出される核のゴミ。その捨て場は何処に。高レベル放射性廃棄物の地層処分研究施設のある北海道幌延町の隣町で暮らす酪農家一家の生き方を軸に、世界初の地下処分施設(オンカロ)が建設中のフィンランド、原子力大国フランスの処分計画地などの現状と、各地で環境にやさしい暮らしを営む人々を描く。チャルカとはインドの糸車のこと。自国で作られた綿花を自分たちで紡ぐことにより、英国支配から独立することを目指したガンジーが提唱したシンボルである。

「灯籠流し Paper Lanterns」



ドキュメンタリー/カラー
2016年/アメリカ/60分
監督:バリー・フレシット

© PAPER LANTERNS.

広島市の爆心地から400メートルの所に憲兵隊司令部があり、そこに拘留されていた米兵捕虜12名が原子爆弾の犠牲となった。被爆者でもある歴史家・森重 昭氏は、被爆米兵の遺族を探して、広島で犠牲となった事実を伝え歩く活動を40年以上も続けてきた。アメリカ人のバリー・フレシット監督は、広島を訪ねた米兵遺族と森氏の心温まる交流を丁寧に取材し、敵味方を問わず、すべての生を奪い尽くしてしまう原爆の非情さと平和への祈りを伝えている。

「愛と死の記録」



劇映画/モノクロ
1966年/93分
監督:蔵原 惟繕
主演:吉永 小百合
渡 哲也
製作:日活株式会社

©日活

昭和40年。広島のリコーダに勤める松井和江はある朝、店の前でバイクに轢かれそうになるが、そのバイクに乗っていた印刷工の三原幸雄と恋に落ちる。しかし幸雄は被爆者であり、原爆症で入院してしまう。和江は幸雄を励まし、回復を祈って懸命に看病するが、その願いも虚しく……。和江と幸雄の愛と死が見る者の心をゆさぶる。日活の名匠、蔵原惟繕監督が渾身の情熱を込めて描く吉永小百合、渡哲也初共演の青春映画の傑作。

「白い町ヒロシマ」



劇映画/カラー
1985年/103分
監督/山田 典吾
脚本/新藤 兼人
製作/現代ぶろだくしょん

昭和20年、学童疎開中に広島市の原爆で母と姉、弟を失った体験を綴った木村靖子の同名小説を「原爆の子」の新藤兼人が脚色。平和を破壊する戦争と原爆への怒りを、子どもたちの深い悲しみと、それを乗り越えて生きる力を持たせようと苦悩する教師の姿を通して描く。「復讐してやる」という子どもの声に、「平和を考える教育をしなければまた同じことが」と危惧する教師。題名の「白い町」とは、家族が来た時に広島には雪が降って白く輝いていたが、夏には黒く焼けてしまったことに由来する。出演は山口崇、菊崎志保、乙羽信子、橋本功など。

「SOS こちら地球」



人形アニメーション/カラー
1987年/62分
製作:共同映画
全国系列会議
製作協力:ビデオ東京
プロダクション
監督:河野 秋和
脚本:加藤 盟

199X年のある日、北極付近の海上で核ミサイルが大爆発を起こした。世界は非常事態となり、パリでは急遽世界首脳会議が開かれた。しかし大国の首脳たちは身勝手に対立は深まるばかり。これを知った動物たちは「核戦争が始まったら地球はおしまい。子どもたちを救えるのは俺たちだけだ!」「パリに行って動物会議をしよう!」。世界の動物たちの代表によって、核戦争の根絶を人間に訴えることになった。エーリッヒ・ケストナー原作の「動物会議」をベースにして作られた、ユーモアあふれる人形アニメーション。

「いのちの岐路に立つ 核を抱きしめたニッポン国」



ドキュメンタリー/カラー
2017年/110分
監督:原村 政樹
プロデューサー:
矢間 秀次郎
語り:中村 敦夫
企画・製作:
映画「いのちの岐路に立つ」
製作委員会

戦争による唯一の被爆国の日本がなぜ今も核を受け入れているのか? 福島原発事故後も原発再稼働にこだわる日本の隠された真実を描く。占領下の日本、米国の報道規制により原爆の人体被害や後遺症が全く国民に知らされない中、絵画により悲惨さを伝えた「原爆の図」の公開。1954年に起きたビキニ核実験による漁船被ばくと、それを打ち消すように広島や全国で開催された「原子力平和利用博覧会」。今も続く原発労働者の被ばく問題、そして原発立地を拒否した町など。被ばく者・体験者の渾身の証言で迫る。

※スチール提供・上映協力:株式会社 日映映像・六ヶ所みらい映画プロジェクト・PAPER LANTERNS・日活株式会社・現代ぶろだくしょん・共同映画株式会社・「いのちの岐路に立つ」製作委員会